

ビス語の系統(続)

西 田 龍 雄

A Comparative Study of the Bisu, Akha and Burmese Languages (II)

by

Tatsuo NISHIDA

ま え が き

さきに提出した“ビス語の系統”と題する一文¹⁾において、私はビス語とアカ語とビルマ語の基礎的な対応関係をさぐり、ついでそのような関係の成立を証明できる各々の音素の対応通則を、初頭子音音素に限って求めた。このような対応通則の設定は、三つの言葉の音素体系を組み立てている個々のメンバーの系譜的な相対関係を解明するとともに、より古い段階に存在したであろう共通形式の推測をも可能にした。しかし、対応通則の設定は、すべての形式について可能なのではなく、特定の条件のもとにある形式にしか求めることができない。さきに言葉が一つの stage からつぎの stage に変遷していくときに、形式の上にもたらされた結果から三つのタイプをたてたが、²⁾ あとのある時代で、同じ共通態から変ってきたいくつの変遷段階を代表する数個の言語間の関係を、形態素の性格について考えた場合、つぎの三つのいずれかにあてはまる。

i) a 言語と b 言語 (そして c 言語……) が、同じ意味を表現するのに、共通態 X の同じ一つの形式から来源した形態素を使う。換言すると、a 言語と b 言語 (そして c 言語……) が「同源形式」を伝承している場合である。たとえば“bee”を意味するビス語 *pjà* アカ語 *bjà* ビルマ語 *pya*²⁾ は、いずれも共通段階の同じ一つの語幹形式 **bya* から受継いだ形式であると考えられる。この“bee” Bisu *pjà* : Akha *bjà* : Bur. *pya* の間の対応関係が比較言語学的に証明されると、それらは「同源形式」であると認め得るのである。

ii) a 言語と b 言語 (そして c 言語……) が同じ意味を表現するのにちがった共通形式から来源した形態素を用いる。換言すると、a 言語と b 言語 (そして c 言語……) が何らかの理由で「異源形式」を伝承している場合である。たとえば“lungs”を意味するビス語 *?aŋ-hmaw* :

1) 「ビス語の系統」『東南アジア研究』4巻3号, pp. 42-68.

2) 上掲 pp. 57-.

アカ語 *ša pò* : ビルマ語 *?a-tšut* は、それぞれ異った語根の形態素を伝承していて、この三つは異源形式にちがいないと考えられる場合がこれにあてはまる。また、かりに **b** 言語が伝承して来た「同源形式」をある段階で借用語に置き換えた場合でも、これに準じて扱うことができる。たとえばビス語が“frog”を意味する **pha* をある段階でタイ語からの借用語 *kop nà* に置き換えた場合も、それとアカ語 *xà phà* およびビルマ語 *pha²* とは異源形式であるとして扱わねばならない。

iii) a 言語も b 言語も（そして c 言語も……）、同じ語根に属する形態素を受継いでいるが、a 言語と b 言語（そして c 言語……）で語幹形式が違っている場合がある。たとえば“to cure”を意味するビス語 *pò-ŋɛ* とビルマ語 *pyok-se* は、同じ語根であるが異った語幹の **pok* と **pjok* から来源していると考えられる (cf. p. 66)。これを「同源異語幹の形式」であるといおう。

音素対応の通則を設定できるのは、この中、i) の条件にある同源形式に限られる。ii) の異源形式は、そのような通則を設定する根拠にもならないし、同源形式にもとづいて設定した通則を適用することもまた不可能である。iii) の同源異語幹の形式には、i) について設定した通則を限定した範囲内で（たとえば初頭子音とか母音と末尾子音の連続形とかに）適用することができる。たとえば、上例“to cure”には Bisu **-ɔk* : Bur. *-ɔk* の対応通則 (Rule 57) を十分に適用できる。

そこで言葉の比較研究にあたって、まず言語間の対応形式が、この三つのタイプの中、いずれに該当するかを決定するところに問題がある。i) の同源形式が必ずしも酷似した形式をもって伝承されているとは限らない。たとえば、アカ語の“four” *?ø* は、ビルマ語の *liy²>le²*³⁾ とは少しも似ていない。一見して異源形式であるかに思える。しかし、つぎのような並行例が発見されると、“アカ語の母音音素 *ø* の前で”という特定の環境において、

Akha *?-* : Bur. *l-* の対応通則をたてざるを得なくなる。(Rule 16 iii)⁴⁾

“grandchild” Akha *?ø* : Bur. *mliy²>mye²*
 “bow” *tša ?ø* : *liy² >le²*
 “to change” *?ø pho-fiw* : *prɔŋ² lay²-se*

したがって、これらの形態素はいずれも同源形式であると認めるほかはない。アカ語のこの種の初頭子音の脱落現象は共通段階の *r-* 子音にもあった。

“to sell” Akha *?ò-fiw* : Bur. *rɔŋ²-se* (Bisu *kòŋ-ŋɛ*)
 “to laugh” *?ú-fiw* : *ray-se* (Bisu *?ú-ŋɛ*)

3) 以下、ビルマ語の形式は、とくにことわらない限り、はじめに中古ビルマ語をあげ、ついでビルマ文語をあげる。たとえば *liy²>le²* は *liy²* が中古ビルマ語 *le²* がビルマ文語形である。そして必要があれば、そのあとで現代ビルマ語形式を加えた。*liy²>le²>lèi*。

4) したがって、Akha *l-* : Bur. *l-* Rule 16 i) ii)
 Akha *?-* : Bur. *l-* Rule 16 iii) (*-ø* に先行する環境で)
 の二つの通則ができる。

“water” ?ú-⁵⁾ : riy>re (Bisu ×)

ここに Akha ?-: Bur. r- の対応通則が成立して、これらもやはり同じ語幹形式から伝承された形態素であると認めることができる。

この初頭の l-, r- が脱落する現象は、共通段階の cluster がアカ語で一般に副次音 -l- -r- を消失してあらわれる傾向ともよく一致している。

一見したところ似ていないけれども、それらを異源形式であると簡単には決められない例をもう一つあげよう。

“village” を意味するビス語 khɔŋ-ba とアカ語 phu は異源形式であることは疑いがない。そしてアカ語 phu とビルマ語 r^wo>rwa も異源形式である。しかし、ビス語 khɔŋ-ba とビルマ語 r^wo>rwa が異源形式であるとは断言できない。何故なら中古ビルマ語形 r^wo はチベット語 groŋ と対応するからである。この一見したところ関係のないビス語とビルマ語の形式は、チベット語形を関連づけると、同源形式であると認めざるを得ないのである。⁶⁾ この関係をつぎのように図示できる。

“village”	*groŋ		*phu
Tibetan	groŋ(-ba)>tšhoŋ-wa		×
Old Burmese	r ^w o >rwa		×
Bisu	khɔŋ-ba<*khrɔŋ-ba<*groŋ-ba		×
Akha	×		phu

外見上かなりよく似た形式が対応通則に合致しないで、一見して似ていない形式の方が通則に適合する場合が往々にしてある。たとえばビス語の “to sit” dúŋ-ŋɛ は、外見からはビルマ語の thuŋ-se> thoŋ-de> thain-de に対応するように思えるが、実はそうではない。Bisu d-: Bur. th- の通則は認められない。しかし、Bisu d-: Bur. n- は一般的な rule である。そして、Bisu -uŋ: Bur. -iy > -e も少数ながらほかに並行例があって通則の一つと認められるから、ビス語の dúŋ-ŋɛ に対応する正当な形はビルマ語 niy-se>ne-de>nei-de “to stay, remain” であることがわかる。これに対して、アカ語はビルマ語の niy-se と thuŋ-se に対

5) “water” にはアカ語で二つの形態素がある。?i-tšù “water” の -tšù と ?ú lón “hot water” の ?ú である。“water” を意味する形態素の分布をあげると、つぎようになる。

	“water”	“water”	“water”	“river”
Bisu	×	×	láj	láj-ba
Akha	?ú-	?i-tšù	×	ló-ba
Burmese	riy>re	×	×	khyɔŋ ² <khloŋ ²
Tibetan	×	chu	×	kluj

6) これとよく似た条件をもつ例に “to sell” がある。

Tib.	htshoŋ-ba	このチベット語形 htshoŋ-ba とビス・アカ・ビルマ語 kròŋ- は
Old Bur.	roŋ ² -se	初頭音を対立する異語幹形式であろう。
Bisu	kòŋ-ŋɛ<*kròŋ-ŋɛ	
Akha	?ò-fiu	

応する二つの形式 $n\emptyset$ -fiw と $d\emptyset$ -fiw を共にもっている。

Earlier stage	*niy-	*hniy ³	*siy	*thuŋ-
Bisu	dúŋ-ŋe	hnwŋ	sùŋ-hnat	×
Akha	$n\emptyset$ -fiw	?a-non	×	dò-fiw
Old Bur.	niy-se	niy	siy-nat	thuŋ-se
	“to sit, stay”	“day”	“gun=bow”	“to sit”

対応通則の設定は、なかなか面倒な仕事である。以上にあげた諸通則のほか、さらに対応形式に検討を加えるならば、なおいくつか特定の環境においてあらわれる通則を発見できるかも知れない。たとえば、

“to forget”	Akha	ŋe-fiw	: Bur.	miy ³ -se	>	me ³ -de
“to speak”		ŋè-fiw	:	miy ² -se	>	me ² -de “to ask” ^{補注1}

この対応例から“アカ語 -e 母音と連続する環境で” Akha ŋ- : Bur. m- の通則を設定して、Rule 8 ii) に準ずる通則 8 iii) として扱えるであろう。

それらの操作は、資料の増補とともに今後の仕事としてのこされている。”

母音音素ならびに母音+末尾子音連続の対応通則

さて、本稿では初頭子音音素の対応通則につづいて、ビス語アカ語および中古ビルマ語の母音音素 (-V) ならびに母音と末尾子音の連続形式 (-VC) について、その対応通則を設定することに目標をおいている。まず、比較の対象になる各々の言葉の -V 形式および -VC 形式の目録を提出する。-V 形式ならびに -VC 形式の主核をになう単純母音は、つぎの体系をもっている。

Bisu	i — e — ε ————— a — u — o — ɔ — w — x	9 母音システム
Akha	i — e ————— ø — œ — a — u — o ————— w — x	9 母音システム
Old Bur.	i — e ————— a — u — *o — ɔ — w	7 母音システム
(M. Bur.	i — e ————— a — u ————— ɔ	5 母音システム)

この三つの言葉の母音システムは、1) いずれも前舌母音と後舌母音の対立から成立っている。そして、2) ビス語は狭：半狭：半広：広の対立を、アカ語は狭：半狭：広の対立を、中古ビルマ語は前舌母音も後舌母音も狭：半狭：広の対立をとっている点にそれぞれの特徴がある。その上、3) アカ語は母音の張唇性と円唇性による対立を不完全ながら前舌母音(e:ø:œ)と後舌

7) また、たとえば“to blow” Bisu to-ŋe Bur. tuk-se に対する Akha bo-fiw に見られる Akha b- : Bur. t- Bisu t- とか、“to be dark” Akha jo-zón : Bur. hməŋ-se の Akha z- : Bur. hm- のような特別な対応関係をも一般に探すべきである。これらの対応形が果して異語幹形式であるかどうかは検討を要する。これに類する事実は、ビルマ語とカレン語系のパオ語の間にも認められる。拙稿「ビルマにおけるパオ族の言語について——南方パオ語パアン方言覚え書」『言語研究』50号, 1966. p. 30-注11) 参照。

母音 (u : o : u : ɤ) の双方にもつものに対して、ビス語は後舌母音にのみ (u : u : o : ɔ : ɤ) この対立関係をもち、中古ビルマ語では後舌母音にのみ、しかもさらに少ない単位 (u : u) のみこの対立が認められる。(現代ビルマ語では円唇と張唇の対立はまったくない)。各々の言語の母音システムの記述的な性格は概略このように考えられる。言語類型からいうと、ビス語は 3×3 system, アカ語は 3+4+2 system, 中古ビルマ語は 3+2+2 system に属させることができる。

i u u	i u u	i u u
e ɤ o	e ø ɤ o	e o
ɛ a ɔ	œ a	a ɔ
ビス語	アカ語	中古ビルマ語

これらの母音音素が特定の子音音素と連続して、つぎの -VC 形式ができる。

アカ語の -VC 形式はもっとも単純であり、-on および -m (これを -Vm と解釈する) の二形式に限られる。ビス語では 9 母音音素がそれぞれ末尾子音 -ŋ, -m, -n, -k, -p, -t, -w, -j と連続して、全体で78種の組み合わせが出来るが (4巻1号 p. 75), その中からタイ語より借用された形式を除くと、つぎの33形式がのこる (cf. 4巻3号 pp. 47-)。これらの形式が比較研究の対象になる。

-a	-i	-e	-ɛ	-u	-ɤ	-u	-o	-ɔ
-aŋ	-iŋ	-eŋ	-ɛŋ	-uŋ	-ɤŋ	-uŋ	-oŋ	-ɔŋ
-am	×	×	×	×	×	-um	×	×
-an	×	-en	-ɛn	-un	-ɤn	-un	-on	×
×	×	×	×	×	-ɤk	×	×	×
×	×	×	-et	-ut	-ɤt	×	×	×
×	×	×	×	×	-ɤp	×	×	×
-aw	×	×	×	×	×	×	×	-ɔj

これに対して、中古ビルマ語における -VC 形式はつぎのように表示できる。⁸⁾

-a	-ay	-aŋ	-an	-am	-ak	-at	-ap	-aň	-atš
-i	-iy	×	-in	-im	×	-it	-ip	×	×
-e	×	-eŋ	×	×	×	-et	×	×	×
-u	-uy	×	-un	-um	×	-ut	-up	×	×
-u	×	-uŋ	×	×	-uk	×	×	×	×

8) 中古ビルマ語形は、拙稿「Myazedi 碑文における中古ビルマ語の研究Ⅱ」『古代学』5巻1号、1956にもとづく。ただここで -^woŋ, -^wok としたのは、文語で -waŋ, -wak となる形で、-ɔŋ, -ɔk としたのは、文語で -ɔŋ, -ɔk となる形である。そして -æfi, -æt 形式は、-e, -et と -aň, -atš によって表記した。

- ^w o	×	- ^w oŋ	×	- ^w ok	×	×	×	×
-o	×	-oŋ	×	-ok	×	×	×	×

これらの形式の一部は、ビルマ文語ではつぎのように変化した。

-iy>-e, -uy>-we, -u>-o, -uŋ>-on, -uuk>-ok, -^wo>-wa, -^woŋ>waŋ, -^wok>-wak, そして、現代ビルマ標準語では、さらに、-e>-ei, -we>-wei, -ay>-e, way>-we, -aŋ>-in, -ak>-e[?], -at-ap>-a[?], -aŋ>-i -in -e -ei, -atš>-i[?] -in, -im>-ein, -it-ip>-ei[?], -un, -um>-oun, -ut -up>-ou[?], -oŋ>-ain, -ok>-ai[?], -waŋ>-uin, -wak>-u[?], -oŋ>-auŋ, -ok>-au[?] にそれぞれ変化した。

中古ビルマ語の stage からビルマ文語の stage へ、さらに現代ビルマ語への音素形式の変化は、かなり規則的に行なわれた。したがって、ビルマ語を対象とする場合、この中のどの stage をとって原則としては同じ結果を得ることができるが、もっとも単純なそして共通形式に近い中古ビルマ語形を用いた方がより簡便で理解し易い。

以上提出したビス語・アカ語・ビルマ語の -V および -VC 形式がそれぞれどのような系譜的な相対関係をもっているかを考察し、その対応通則をつぎに設定していきたい。

Rule 18. Bisu. -a : Akha -a : Bur. -a

“moon”	ù hla	bà la	la ³	*-hla ⁹⁾
“to hear”	kjà-ŋε	gà-fiu	kra ² -se	*gra-
“tongue”	mèn hlà	mè la	hlya	*-hlya
“flesh”	?aŋ-šà	šà dží	a-sa ²	*a-ša ²
“to be bitter”	khà-ŋε	jo-xà	kha ² -se	*qha- ²

このほか、すでに掲げた例の中、つぎの同源形式がある。

“to fall” *gla-, “to drop” *khla-, “nose” *hna-, “ear” *na²-, “bee” *bya², “arrow” *hmya², “field” *Cya, “to be thin” *ba-, “to listen” *na-, “to be many” *mya²-, “to go” *la-, “pain” *na, “tiger” *kla², “cheek” *ba², “earth” *-tsha², “medicine” *-ga², “to borrow” *hpa-.

また、この対応通則を適用できる同源形式がビス語とビルマ語にのみ保存されている例がある。

“to get”	Bisu ga-ŋε	Burmese ra ³ -se	*ra-
“food”	?aŋ-tsa	?a-tša	*a-tsa~a-dza
“to itch”	hjà-ŋε	ya ² -se	*Cya ² -

9) すでに子音対応通則を設定し、その共通形を推定したから、ここで *印をつけて、形態素の共通形式を示すことにする。なお、トネームの対応はつぎの原則にしたがっている。

Bisu 高平型 (á) :	Akha 高平型 (á) :	Bur. 低平型 (a)
中平型 (a) :	中平型 (a) :	高降型 (a ³), -V stop 音節
低平型 (à) :	低平型 (à) :	高平型 (a ²), -V stop 音節

“place”	hjá	ra	*Cra
“between”	kjà hlà	?a-kra ²	*kra ² -

この確実な対応通則に対して、ビス語で少数ながら別の通則がはたらく形式がある。

Rule 19. Bisu -ɔ : Akha -a : Bur. -a

“salt”	tsò-mè	sà dx	tšha ²	*tsha ₂ ²
“fish”	?aŋ-ŋò	ŋà šà	ŋa ²	*ŋa ₂ ²
“to be enough”	kó-ŋe	ɣa-ma	×	*Ga ₂

これらの同源形式は、理由はわからないが Rule 18 とは別にビス語がある変遷段階で a 母音から ɔ 母音への変化を起した結果でできた。さきに述べた Pyen 語および P'u-Noi 語では、これに -a 形式が対応するから (4巻3号 p. 47), この変化が起ったのは、かなりののちの stage であることも間違いない。(cf. Tibetan “salt” tshwa < tsha-ba, “fish” ŋa)

Rule 20. Bisu -a : Akha -a : Bur. -ak

“hand”	là-pù	?a-là	lak	*lak
“leaf”	?aŋ-phà	?a-pha	phak	*phak
“pig”	wà	zà	wak	*wak
“to be ashamed”	šà tso-ŋe	šàdó ŋa	hrak krək-se	*hrak-

このほか、上掲例の中、つぎの同源形式がある。“hen” *krak, “upside” *a-thak, “to weave” *rak-, “bird” *hŋak (Bisu ha-jà : Bur. hŋak), “banana” *hŋak (Akha ŋa-be : Bur. hŋak pyɔ²), “to be black” *nak (Akha jo-na : Bur. nak-se)。

これに対して、共通形式 *myak “eye” (Bisu mè-hnuw : Akha mjà nuw : Bur. myak tši) にあたるビス語 mè- は、*-ak が mj- につづくという環境において、-yak から -ja への通則 (Rule 20) にしたがわず、-yak から -je > -ε への別の変化をたどった。しかし、残念ながらこの変化には並行例がない。

Rule 21. Bisu -aŋ : Akha -o : Bur. -aŋ

“to see”	hmjáj-ŋe	mó-fiw	mraŋ-se	*hmraŋ-
“old man”	jà màŋ	tshó-mò	?u-maŋ ²	*-maŋ ²
“you”	naŋ	no	naŋ	*naŋ
“boiled rice”	hàŋ tsá	hò	tha-maŋ ²	*-maŋ~haŋ
“deaf”	nà pàŋ	nà bò	na-paŋ ²	*-baŋ ²

このほか、ビス語とアカ語にのみ同源形式が保存されて、ビルマ語にはそれぞれに対応する形式をもはや見出し得ない形態素も少なくない。

“to drink”	Bisu táŋ-ŋe	: Akha do-fiw	< *daŋ-
“language”	tàŋ	: dò	< *daŋ ²

“person”	tsháŋ	tshó hà	< *tshaŋ
“vulture”	tsáŋ-ba	ú dzó	< *dzaŋ
“snake”	ʔù-láŋ	ʔá lò	< *laŋ
“he”	jaŋ	tšo	< *yaŋ
“insane person”	ʔaŋ-tshàŋ	ʔà-dzò	< *dzaŋ ²
“river”	láŋ-ba	ló-ba	< *laŋ

ビス語とビルマ語の間にも、この通則にしたがう二、三の対応例がある。

“root of tree” Bisu ʔaŋ-khjè jaŋ : Bur. ʔa-raŋ² (cf. Akha dù-ki)

“to weigh” Bisu tšaŋ-ŋε : Bur. khyaŋ³-se

Rule 22. Bisu -o : Akha -o : Bur. -^wo>-wa

“door”	láŋ ko	là xo	tam kha ² <*kh ^w a	*G ^w o
“to walk”	jò-ŋε	tšho-ŋi	s ^w o ² -se>swa ² -de	*tšh ^w o ²
“rain”	mèŋ hò		mu-r ^w o>rwa	*-r ^w o
“tooth”	sò phjè	sè<sò(?)	s ^w o ² >swa ²	*s ^w o ²

ビルマ文語形式 -wa が、中古ビルマ語 ^wo に遡り得ることは、別の根拠により証明できるから、¹⁰⁾ ビス語・アカ語の対応形式は、中古ビルマ語に近い特徴をもっていることになる。ただアカ語の “tooth” sè はよくわからない。(cf. Tibetan “door” sgo, “to walk” hgro, “tooth” so)。

この通則と並行して、つぎの二つの対応通則、Rule 23 と Rule 24 を認めることができる。

Rule 23. Bisu -o : Akha -o : Bur. -^wok>-wak

“rat”	ho-tàm	ho-tšà	kr ^w ok>krwak	*kr ^w ok
“grass”	mò-kà	za-mò	mrak<*mr ^w ok	*mr ^w ok
“ant”		ʔa-ho	pa-r ^w ok>rwak	*Cr ^w ok

Rule 24. Bisu -oŋ : Akha -on : Bur. -^woŋ>-waŋ

“horse”	ʔaŋ-mòŋ	mòn	mraŋ ² <*mr ^w oŋ ²	*mr ^w oŋ ²
“to enter”	ʔóŋ-ŋε	ʔí-ʔón-ŋi	waŋ-se	*ʔ ^w oŋ-
“to open”	phoŋ-ŋε	phon-ŋi	ph ^w oŋ ³ >phwaŋ ³ -se	*ph ^w oŋ-

そのほか、ビス語とビルマ語の間に、この対応通則にしたがう数個の同源形式を発見できる。

“husband”	Bisu blóŋ	: Bur. laŋ	<*l ^w oŋ
“to be high”	ʔaŋ-hmòŋ	: mraŋ ³ -se	<*mr ^w oŋ-
“lake”	lòŋ ʔòŋ	: ʔaŋ ²	<*ʔ ^w oŋ ²

10) 上掲拙稿「Myazedi 碑文における中古ビルマ語の研究 II」pp. 30-.

“pine”	ʔaŋ-hmòŋ	: satš maŋ ²	< *m ^w oŋ ²
“breast”	lòŋ-pet	: raŋ pat	< *r ^w oŋ-

これらのビルマ語形 -aŋ も、-^woŋ から来源したと推測して差支えがないであろう。

Rule 25. Bisu -u : Akha -u : Bur. *-ætš > -atš

“to be new”	šù-ŋe	jo-šù	satš-se	*šætš
“year”	-hnw	nuw-xò	hnatš	*hnætš
“wrist”	là tshù	là tsw	lak tšhatš	*-tšhætš

Rule 26. Bisu -u : Akha -u : Bur. -ay

“to buy”	vú-ŋe	zú-fiw	way-se	*vay-
“star”	ʔù-kiù	ʔa-gú	kray	*gray
“to laugh”	ʔú-ŋe	ʔú-fiw	ray-se	*ray-

Rule 27. Bisu -u : Akha -u : Bur. -uy

“dog”	khù	ʔa-khù	khuy ²	*khuy ²
“yellow”	ʔaŋ-šú	jo-šú	hruy “gold”	*hruy

Rule 28. Bisu -u : Akha -u : Bur. -iy

“foot”	là khù	ʔa-khú	khriy	*khriy ₂
“to untie”	phú-ŋe	phú-fiw	phriy	*phriy ₂

Rule 29. Bisu -i : Akha -i : Bur. -uy

“blood”	ši	ši	suy ²	*suy ₂ ²
---------	----	----	------------------	--------------------------------

Rule 30. Bisu -i : Akha -i : Bur. -iy

“to die”	ší-ŋe	ší-fiw	siy	*siy
“to give”	pì-ŋe	bì-fiw	piy ²	*piy ²
“grandmother”	ʔa-phì	ʔa-phì	ʔa-phiy ² -ma	*ʔa-phiy ² -

Rule 31. Bisu -i : Akha -i : Bur. -i

“fire”	bì-tho	mì-dzà	mi ²	*mi ²
“animal’s tail”	tòŋ hñi	dò-mì	ʔa-mri ²	*mri ²
“girl”	jà bì	zà mì	sami ²	*mi ²

Rule 25 に対して、ビス語で -u とならず -uŋ になる “heart” と “tree” は、さきに述べたように (4巻3号 p.60), 実はそれぞれチベット語形 sñiŋ, shiŋ に対応する形式であって、ビルマ語形とは異語幹形式である。

“heart”	Bisu nuŋ-ba	Akha nuw-ma	Bur. hnatš lum ²	Bisu *hnæŋ	Bur. *hnætš
“tree”	tsùŋ tsuŋ	×	satš	Bisu *tsæŋ	Bur. *sætš

上掲例のほかに、Rule 26 には、“to be wide” Bisu ʔaŋ-klú : Bur. kyay-se, “to be

separated” Bisu klù-ŋɛ : Bur. kway²-se, “to itch” Akha zù-fiu : Bur. way²-se, “sand” Akha khà-sù : Bur. say² があり, Rule 27 には “medicine” Bisu tsù-kà : Bur. tšhiy², “to count” Akha xù-fiu : Bur. riy-se, “water” Akha ?ú- : Bur. riy, “copper” Akha gù : Bur. kriy² が, Rule 31 には, “younger brother” Akha ?a-ńí : Bur. ńi, “fruit” Akha ?a-sì : ?a-si², “to know” Akha šì-ńá-fiu : Bur. si³-se, “night” Bisu mùŋ khi : Akha ?ù kì の諸例がある。

以上の Rule 25 から Rule 31 までの対応通則をまとめると, 基本的にはつぎのような関係になる。

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
Bur.	*-ætš>-atš	-ay	-uy	-iy	-i
Bisu	-u	-u	-u -i	-u -i	-i
Akha	-u	-u	-u -i	-u -i	-i

ビス語とアカ語で(1)と(2)が合一し, (3)と(4)は共に二つの形式に分裂して, その中の一つが(1)と, 他の一つが(5)とそれぞれ合一したことがわかる。この(3)と(4)が分裂する条件は, 明らかではないが, 他の言語との対応関係から共通形式自体が異ったものと推測して, それを -iy, -iy₂, -uy, -uy₂ によって示した。したがって, つぎの例

“urine” Bisu ?i-ši : Akha ?i-šù : Bur. siy²

では, ビス語は siy₁ 形式に, アカ語は siy₂ 形式にあたるが,

“to hit” Bisu tù-ŋɛ : Akha di-fiu : Bur. ti³-se

では, ビス語は tiy₂, アカ語は diy₁, ビルマ語は ti の形式をそれぞれもっていたことになる。これらはいずれも上に掲げた通則を適用できる形式であるけれども, その通則が適用される共通形式自体が異ったために違った母音形式をもつようになったと解釈する。さらに, つぎの対応

“to be big”	?aŋ-hù	?a-hù	kri ² -se
“to be near”	?aŋ-dù	×	ni ² -se

では, ビルマ語の *kri², *ni² 形式に対して, ビス語, アカ語は共に, *hiy₂²<kriy₂², *niy₂² 形式をもっていたと推測できる。

対応するビルマ語形式は明瞭ではないが, ビス語とアカ語の間につぎの Rule 32 を認め得る。

Rule 32. Bisu -ɛ, -ɛŋ : -Akha -i : Bur. ?(-iy?)

“to go” ?é-ŋɛ : ?i-fiu,	“to go” lé-ŋɛ : lí-fiu
“outside” ?aŋ-hŋé : la-ńí,	“root” ?aŋ-khjè- : dùkí
“cat” ?à-mèŋ : ?a-mí,	“excrement” ?ɛŋ : khi (Bur. khiy ²)

これらの形式はビス語とアカ語に孤立した形式ではなく, これと同源関係にある形態素は,

そのほかの同系統の言葉においても見出し得る。

	Maru	Lashi	Lahu shi	Lahu na	Nung ¹¹⁾
“to go”	je-ló-wa	ló	×	×	di
“outside”	a-jeŋ	a-jam	×	×	×
“root”	kyì	kyì	ô tšhĩ	sũ ɣu	gi
“cat”	×	×	nà mĩ khoe	mĩ mè	mi
“excrement”	khjí	khjí	ô khé	khê	ni (?)

このビス語 -ε, -εŋ : アカ語 -i の Rule をもつ共通形式を、かりに *-e *-εŋ であらわしておきたい。

ビス語にもアカ語にも -u 母音に対立する -ɔ 母音があった。そして, Bisu -ɔ : Akha -ɔ, Bisu -ɔŋ : Akha -ɔ は規則的な対応通則であるが, それにあたるビルマ語形はあまり明瞭ではない。

Rule 33. Bisu -ɔ : Akha -ɔ : Bur. -un?

“to pull”	šɔ-ŋε	: ɣɔ-fiu	: run ² -se	*hrɔn-(?)
“to shoot”	pɔ-ŋε	: bɔ-fiu	: ×	*bɔ-(?)
“to hate”	mɔ-ŋε	: ×	: mun ² -se	*mɔn-
“to be far”	wɔ-ŋε	: ×	: wiy ² -se	*vɔ ² -(?)

Rule 34. Bisu -ɔŋ : Akha -ɔ : Bur. -u?

“town”	?aŋ-hmɔŋ	: mɔ	: mrw ³	*hmɔŋ (?)
“pillar”	jám jɔŋ	: xò zɔ	: ×	*-zɔŋ (?)
“to arrive”	khɔn-ŋε(?)	: kɔ-fiu	: ×	*khɔŋ-(?)

これらの共通形式は, かりに Rule 33 に -ɔ, -ɔn, Rule 34 に -ɔŋ とすべきであろうか。なおビス語形式 -ɔk (ex. “jump” pɔk-ŋε), -ɔt (ex. “insane” pɔt-ba) に対応するほかの言語の形式も不明である。

Rule 35. Bisu -iŋ : Akha -on : Bur. -aň

“liver”	?aŋ-tshiŋ	sa-tsòn	?a-saň ²	*tshæň ²
“to be ripe”	hmiŋ-ŋε	×	maň ³ -se	*hmæň-

Rule 36. Bisu -εŋ : Akha -on : Bur. -aň

“name”	?aŋ-hmeŋ	tše-mjón	?a-maň	*hmæŋ
--------	----------	----------	--------	-------

Rule 37. Bisu -uŋ : Akha -on : Bur. -aň

“thread”	khúŋ	sà-khón	khraň	*khræn
----------	------	---------	-------	--------

11) Maru 語 Lashi 語 Lahu shi 語 Lahu na 語 は私の資料にもとづき Nung 語は, J.T.O. Barnard, *A Handbook of the Ráwng Dialect of the Nung Language*, Rangoon, 1934 によった。

“to be full”	pluŋ-nùŋ-ŋɛ	×	prañ ³ -se	*præn-
“to fall down”	hlùŋ-ŋɛ	×	hlañ ² =hlay ² -se	*hlæn ² -
“to mew”	-bùŋ-ŋɛ	?	mrañ	*mræn-

この Rule 35 から Rule 37 までは、いずれもビルマ語形 -añ に対応する通則である。対応例は多くはないけれども、これからビルマ語の -añ はアカ語でいずれも -on にあたり、ビス語では -iŋ -eŋ -uŋ に分裂していることがわかる。したがって “to be clear” Akha jo-gón : Bur. krañ-se, “when” Akha fia-mjon : Bur. mañ “what” は、ビス語の対応形がないために、この中のどれに属するのかわからない。ビス語で三つの形式に分裂している条件は明らかではないが、Rule 35 はチベット語で -in になり (“liver” mtšhin-pa, “to be ripe” smin-pa), Rule 36 はチベット語で -iŋ 形 (“name” miŋ) になる事実ははっきりしている。したがって、かりに Rule 35 には -æñ, Rule 36 には -æŋ, Rule 37 には -æɛn を共通形式としておく。

	Bur.	Bisu	Akha	Tibetan
*-æñ	-añ	-iŋ	-on	-in
*-æŋ	-añ	-eŋ	-on	-iŋ
*-æɛn	-añ	-uŋ	-on	?

Rule 38. Bisu -ɛ : Akha -e : Bur. -at, -w-at

“to be hungry”	bè-ŋɛ	mè-fiw	mwat-se	*mat
“to kill”	sè-ŋɛ	se-fiw	sat-se	*sat-
“to take off”	hle-ŋɛ	le-fiw	khywat-se	*khyat-
“to lick”	bè-ŋɛ	mjà-fiw	×	*myat-

さきに述べたごとく（4巻3号 p. 52）、これらのビス語にはプノイ語 -at が対応するから、この共通形を -at とするのには問題はない。この対応通則に関連して、つぎの二つの異語幹形式があらわれてきた。その一つは、“flower” Bisu ?aŋ-wɛ : Akha ?a-bó je (P’u-Noi a-voat) に対する Bur. pan² である。前者は *-vat を後者は pan²<ban² を語幹形式としていた。第二は “to fear” Bisu khe-ŋɛ (P’u-Noi khàt) に対する Akha gu-ña-fiw : Bur. khrok-se である。このビス・プノイ語形は *khat から、アカ語・ビルマ語の方は *grök から来ている異語幹形式である。

ビス語では -ɛ 母音に対立する半狭母音 -e がある。これには対応例は少ないがつぎの rule を考え得る。

Rule 39. Bisu -e : Akha -e, -œ : Bur. -u

“thunder bolt”	mùŋ kjè	: ?ù džè džè	: muw ² kruw ²
“chain”	kàj kje	: ×	: kyap kruw ²
“corner”	?aŋ-kje	: là tšhóé	: ×

あとで述べるように、ビルマ語の -u にあたる規則形はアカ語の -œ であり、ビス語の -aw である。これには多くの例がある。したがって、この -e はビス語では -aw の変形として、アカ語では -œ の変形としてあらわれたことになる。しかし、いかなる環境での変形なのかは今の段階ではわからない。

Rule 40. Bisu -u : Akha -u : Bur. -u

“silver”	phlú	phjú	phru	*phlu
“to be thick”	thú-ŋɛ	jo-thú	thu-se	*thu-
“to dig”	tù-ŋɛ	dù-fiw	tu ² -se	*tu ² -

Rule 41. Bisu -u : Akha -o : Bur. -u

“to look”	hu-ŋɛ	ho-fiw	hru-se	*hru ₂ -
“to stir”	kù-ŋɛ	kò-fiw	ku ² -se	*ku ₂ ² -

Rule 42. Bisu -u : Akha -u : Bur. -up

“to suck”	kju-ŋɛ	šu-fiw	tšup-se	*kyup-
“to sew”	kù-ŋɛ	gù-fiw	khru ² -se	*Grup-

この通則は非常に明瞭である。ビス語・ビルマ語の -u に対して、アカ語で -u と -o にわかれて対応するのは、やはり共通形式の相違を反映しているのであろう。Rule 40 には -u, Rule 41 には -u₂ を用いてその相違を示した。

Rule 43. Bisu -am : Akha -m : Bur. -am

“iron”	šám	šm	sam	*šam
“fence”	khám-thu	ja khm	khram	*khram
“bear”	?ò wám	xa mím	wak wam	*vam
“to fly”	pjám-ŋɛ	×	pyam ² -se	*pyam ² -

Rule 44. Bisu -am : Akha -a : Bur. -am

“to smell”	hnám-ŋɛ	nà bé-fiw	nam ² -se	*hnam ² -
“hair”	tám khúŋ	tšha-khón	tšham khrañ	*tham-

Rule 45. Bisu -um : Akha -m : Bur. -um

“mortar”	tòŋ tshúm	thòn tshm	thoŋ ² tšhum	*-tshum
“to clothe”	túm-ŋɛ	dm-fiw	×	*dum-
“to pile up”	×	tšhè brm	pum-se	*bum-
“to pay money”	×	phjú zòm	sum ² -se	“to use” *dzum ² -

Rule 46. Bisu -um : Akha -m : Bur. -im

“house”	júm	ñm	?im	*im
“to be low”	hñum-ŋɛ	jo-ñm	nim ³ -se	*nim-

“potato”	plùm	bjm̄-ma	pin ² -ʔu<*prim ² -ʔu	*blim ² - 補注 ²
“cloud”	×	m̄m̄ d̄m̄	tim	*dim

Rule 47. Bisu -u : Akha -u : Bur. -ip

“to sleep”	jù-ŋɛ	ju-fiu	ʔip<yip-	*yip-
------------	-------	--------	----------	-------

Rule 43 から Rule 47 までは、共通形式 -am, -um, -im, -ip に関する通則である。この中 -am が Rule 43 と Rule 44 の二つに分裂するほか、アカ語では一つの形式 -m に合一し、ビス語では -im と -um が -um になり、-am と -um の対立を形成するのが特徴である。

Rule 48. Bisu -aw : Akha -œ : Bur. -u

“to steal”	khàw-ŋɛ	xòe-fiu	khw ² -se	*khw ² -
“to be sweet”	tsháw-ŋɛ	jo-tshóe	khyu-se	*khyu-
“to wash”	kjàw-ŋɛ	jòe-fiu	riy khyu ² -se	*khyu ² -
“bone”	ʔaŋ-gàw	šà jòe	ʔa-ru ²	*a-ru ²

Rule 49. Bisu -uŋ : Akha -œ : Bur. -u

“to cry”	ʔúŋ-ŋɛ	ŋóe-fiu	ŋu-se	*ŋu-
“finger”	là hñùŋ	là nœ	lak hñu ²	*-hñu ²
“to awake”	dùŋ-ŋɛ	nœe-fiu	nu ² -se	*nu ² -
“to wither”	hjúŋ tshà	ñœe-ʔi-fiu	hñu ² -se	*hñu ² -

Rule 48 と Rule 49 の二つの通則の成立、すなわちビス語における -uŋ と -aw の分裂は、明らかに共通形式の初頭音が鼻音であるか鼻音でないかの条件にしたがって起こった。この通則からみると、“sky” Bisu mùŋ : Bur. mu² にあたるアカ語 m̄m̄, “roof” Bisu júm mùŋ : Bur. ʔim mu² に対応するアカ語 ñm̄ m̄m̄ はそれぞれ mœ および mœe から変化したことになる（現代アカ語には mœe 音節はない）。ビス語の鼻子音以外と結合する -uŋ はいずれも借用語である。“socks” thúŋ tin, “rainbow” phì húŋ。

一方ビス語の -aw の中には、プノイ語の -ap にあたる形式が含まれていることは、さきに例をあげた（4巻3号 p. 52）。これにはアカ語の -o が対応する。

Rule 50. Bisu -aw : Akha -o : Bur. -ap

“needle”	khúŋ kjaw	ʔa-χò	khyup ʔap<qhap
“to pierce”	tsháw-ŋɛ	tsò-fiu	kyap-se “to put into”

しかし、この Bisu -aw : P'u-Noi -ap の関係をもつ形態素は、ビス語系に特有の形式が多く、またタイ語からの借用語も多い。

アカ語には -œ 母音に対立して -∅ 母音がある。これにはビルマ語の -iy, -ay が対応する。しかしそれらにあたるビス語形を発見できない場合が多い。したがって、アカ語の -∅ 母音はさきに述べた -u 母音からある環境で生れた変形であると考えられることができる。

Rule 51. Bisu -uŋ(?) : Akha -ø : Bur. -iy, -ay

“four”	?	ʔø	liy ²	*liy ²
“to sit”	dúŋ-ŋε	nø-fiw	niy-se	*niy-
“to change”	?	ʔø	lay ²	*lay ² -

“grandchild” と “bow” の対応例は, p. 53 を見られたい。

Rule 52. Bisu -ɔ, -ɔŋ : Akha -o : Bur. -uŋk

“to blow”	tɔ-ŋε	:	bo-fiw	:	tuŋk-se	*tuŋk-, buŋk-
“to bite”	kɔ-ŋε	:	ko-fiw	:	kuŋk-se	*kuŋk-
“to like”	sɔ-ŋε	:		:	khyuŋk-se	*khyuŋk
“stomach”	pɔŋ-ba	:	bò-ma	:	wam ² puŋk	*-buŋk

Rule 53. Bisu ? : Akha -u : Bur. -uŋ

“wave”	?	:	ʔi-lú	:	hluŋ ²	*hluŋ
--------	---	---	-------	---	-------------------	-------

中古ビルマ語の -uŋ をもつ共通形が少ないために, ビス語の対応形もアカ語の対応形もはっきりしない。

Rule 54. Bisu -ɔ, -ɔŋ : Akha -o : Bur. -ɔ

“waist”	ʔaŋ-kjò	:	jò	:	kyɔ ²	*kyɔ ²
“forest”	tòŋ kòŋ	:	?	:	tɔ ³	*tɔ~*tɔŋ

この -ɔ, -ɔŋ をもつ共通形式も少ない。つぎの “to call” はそれぞれの言語が Bisu *khu-, Akha *khu-, Bur. *khu- のように母音音素を変えた三つの異語幹形式を代表するのであろう。

“to call”	háw-ŋε	:	khú-fiw	:	khɔ -se
-----------	--------	---	---------	---	---------

Rule 55. Bisu -ɔŋ : Akha -on : Bur. -ɔŋ

“mortar”	tòŋ tshúm		thòn tshím		tɔŋ ² tšhum	*tɔŋ ² -
“wing”	ʔaŋ-tóŋ		ʔa-dón		ʔa-tɔŋ	*a-dɔŋ

Rule 56. Bisu -ɔŋ : Akha -o : Bur. -ɔŋ

“boat”	lóŋ	:	lò	:	lɔŋ ²	*lɔŋ ²
“to sell”	kòŋ-ŋε	:	ʔò-fiw	:	rɔŋ ² -se	*rɔŋ ² -~gɔŋ-
“to be long”	hmóŋ-ŋε	:	jo-mó	:	×	*hmɔŋ-

Bisu hóŋ-ŋε : Bur. hɔŋ-se “to bark”, Bisu ʔaŋ-lɔŋ : Bur. ʔa-lɔŋ² “corpse”,

Bisu ʔaŋ-plɔŋ : Bur. phrɔŋ³-se “to be straight”

アカ語では, -on と -o の二形式があった。前者が Rule 55 に, 後者が Rule 56 にあらわれる。この対応関係には問題はない。

Rule 57. Bisu -ɔ, -ɔk : Akha -o : Bur. -ɔk

“rice”	kɔ		xo		khɔk	*khɔk
--------	----	--	----	--	------	-------

“skin”	ʔaŋ-kho	ba-xo	ʔa-khok	*ʔa-khok
“bottom”	ʔaŋ-ʔok	dà-ʔo	ʔok	*ʔa-ʔok
“monkey”	+mjo	ʔa-mjo	myok	*ʔa-myok

ビス語の -o は -ok から来源したことに疑いはない。そのほか Bisu pjo-ŋe : Bur. pyok-se “to disappear”, Bisu tũŋ-bo : Bur. ʔa-mok “cock’s comb”, Akha tso-fiw : Bur. tšhok “to build” などの対応例がある。

“to be dry” ku-ŋe : jo-gu : khrok-se のビス語・アカ語には *Gray を推定でき、ビルマ語形 khrok とは異語幹形式であると考えられる。

ビス語には、この -o に対立する -o 母音があったが、それにあたるアカ語およびビルマ語の対応形はわからない。(cf. 4 巻 3 号 p. 51. -oŋ 形式の例として “bracelet” là-kòŋ, “to hide” tshoŋ-ŋe を補う。)

ここでは、もっとも対応例の多いものを対応通則と認めて、その通則によって解釈できない例を、共通態における異語幹形式として扱わざるを得なかった。そして、その異語幹形式の間に認められる対応関係がかなりの例に並行することを発見できたときには、それを新たに通則としてとり上げた。たとえば、さきにあげた Bisu -i : Akha -u : Bur. -iy の対応をここでは異語幹形式として扱ったけれども、もしこの対応関係をもつ例がほかに多く認められるならば、これは通則としなければならないであろう。異語幹形式と一応認めている形式は、なお検討の余地が十分ある。

む す び

以上に設定した -VC 形式は、なお不完全なすき間の多い体系になった。これは共通形式が三つの言葉の体系を素直に反映していない点を含んでいるからである。ことにビス語の -an, -en, -un, -ut, -xn, -xŋ, -xk, -xt, -un, -o, -oŋ, -on, -oj およびビルマ語の -an, -in, -it, -ut の間の関連はなおまったくわからない。それには、いくつかの理由がある。もっとも大きい要因は、形態素の分布関係にある。ビス語もアカ語もビルマ語もそれぞれ特有の形態素を含んでいるが、それらの形態素が上に掲げた対応不詳の諸形式をもった異源語であることが多いためである。したがって、ビス語の系譜関係をよりたち入って証明するためには、この異源形式の来源を解明しなければならない。たとえば “head” を意味するビス語 ʔaŋ-tù の -tù は、アカ語 ùʔ-dù と関係するが、ビルマ語の u²-khon² とは直接に結び付かない。そして、Lahushi 語 ʔá-kù とともに Maru 語 ʔáw ləm とともに Lashi 語 ʔú-lèm とともに関係がない。しかし Lahu na 語 ʔá-tù-kù, Lisu 語 ʔúh-dỳh とは関連をもっている。そして、これらの形態素形式の大部分は、チベット語の dbu と mgo の二形式に包括されてしまう。これらの共通態には *du, *bu, *gu の三形式があって、それが各々の言葉に任意の分布を示したことになる。そ

れ故、チベット語についても、ビルマ語についても、そのほかの語彙ストックの豊富な有力な言葉について（たとえば Lushai 語とか Lepcha 語とかのについて）も、是非とも類語族（word family）を作っていかなければならない。そして各々の類語族のメンバーになる形態素の分布関係を広く調査する必要がある。この手続を経ないと、この語派の系譜的な親近関係は十分には証明できないであろう。

私たちが比較研究の対象にするのは、個々の音素あるいはその連続ではなくて、個々の音素から成りたっている体系なのである。私の以上の操作もこのような体系間の比較を目指して来たつもりである。しかし、そのような比較研究は実はなかなか簡単には成功しない。たとえば A 言語の体系が a-i-u-e-o の 5 母音から成りたち、B 言語の体系が a-i-u の 3 母音から成りたっているとす。そして A 言語の a が B 言語の a に、A 言語の i と e が B 言語の i に、A 言語の u と o が B 言語の u に規則的に対応するというような場合には、五つの対応通則をたてれば解決できる。そして A 言語の母音体系と B 言語の母音体系の関係はすっかり証明されたことになる。しかし、ビス語・アカ語・ビルマ語のような音素体系とその組み合わせ形式がやや複雑な言葉であっては、これに近い証明もなかなか実現し難い。

以上に設定したいくつかの Rules は、これらの三言語間にあるもっとも顕著な関係をすべて代表していると思う。そして、これらの rules はより範囲を拡げた比較研究において、たとえばロロ語系やラフ語系の言葉を含めた比較研究において、なお若干の訂正と多くの増補を必要とするであろう。

補注 1 (p. 55)

アカ語の “to speak” *ɲè-fɯw* は、また中古ビルマ語の *ɲak* “to speak” (cf. Tib. *ɲag* “speech, talk”) に対応する形式とも考え得るが、*ɲè-fɯw* と *ɲak* はその -VC 形式が対応通則 (Rule 20) と合致しないから、いまの段階では同源形式とは認め難い。

補注 2 (p. 65)

この推定形式は、アラカン地方の Marma 方言に保存される *prim* “taro, Colocasia” に正しく対応する。そしておそらくマルマ方言の *prim* は **plim* から来源しているのであろう。

Marma 方言の *prim* については、Lorenz. G. Löffler, “Ein Kinderspielvers der Marma und seine Parallelen bei den Mru,” *Zeitschr. f. Ethnol.*, 84, 1959. および R. Shafer, *Bibliography of Sino-Tibetan languages*, II. 1963. p. 2. をみられたい。cf. 共通タイ語形 *phluək*

補注 3 (p. 67)

これらの言葉で “head” を意味する形態素の分布関係と単語形式の構成を図式にすると、つぎのようになる。

Earlier stage	prefix	*bu	*du	*gu	
Bisu	ʔaŋ		-tù		prefix + *du
Akha		ʔù	-dù		*bu + *du
Burmese		ʔu ²		-khəŋ ²	*bu + *gu
Lisu		ʔúh	-dýh		*bu + *du
Lahu Na	ʔa		-tù	-kù	prefix + *du + *gu
Lahu Shi	ʔa		-kù		prefix + *gu
Maru		ʔáw		-lám	*bu + lam
Lashi		ʔú		-lèm	*bu + lam
Tibetan		dbu (resp.)	mgo		*bu, *gu